

平成18年9月7日
保護者の皆様へ

滝川市立江部乙中学校
校長 高瀬 裕二

全校演劇 「青雲の志（せいうんのころざし）」について

今年2月、根室市の桑野さんという老人の方が「江部乙出身の福住医師のことを是非地元の方に伝えていただきたい」「根室でも歴史から忘れ去られようとしています」と、元江部乙小学校のト部校長先生に、江部乙出身の医師、福住一郎氏の生き様を伝えられました。同級生らに画家の一木万寿三、岩橋英遠さんがおられた時代です。本校ではそのお話を伺い、是非とも生徒が学習する中で、医師として使命感とヒューマニズムにあふれた一人の先輩の生き様を、時間をかけて現代（いま）に伝えていこうと考えました。今回はプロローグとして、出会いを全校演劇「青雲の志（ころざし）」として、上演致します。公演は9月10日（日）13：00より本校体育館でございます。

“学びは足下、ふるさと江部乙から”を信念に、全校生徒一丸となって頑張っておりますので、是非とも学校祭にお越し頂き、ご観覧下さいますようご案内いたします。

■ 福住一郎（ふくずみいちろう） ■

明治38年(1905).3.11～昭和19年(1944).4.22

根室町(現、根室市)の小児科医師、歌人。南江部乙屯田兵村(現、滝川市江部乙町)で林檎園を営んでいた、福住関次郎の次男に生まれる。大正2年(1913)江部乙村北辰小学校へ入学、同10年同校高等科卒業。同期に一木万寿三、一期上に岩橋英遠らがいる。昭和2年(1927)北海道大学医学部へ進んだ。卒業後秋田県庁等に勤務し同10年から再び北海道大学医学部でのジフテリアの研究で医学博士となった。

昭和13年、根室の病院へ小児科医長として赴任し、翌14年、小児科医院を開設した。無口温厚で住民から信用されていたという。昭和7年(1932)に結婚したフミ夫人も医師である。

同18年の夏より、根室の飛行場建設に強制的に連行され、過酷な条件で重労働を課せられていた多くの朝鮮人の間に発疹チフスが流行した。ヒューマニズム溢れる使命感で、有光藤三郎医師と共に協力して治療にあたっていたが、昭和19年(1944)同病に感染して没した。享年39歳。根室病院の榊原徳太郎、開業医有光藤三郎も感染して犠牲になった。戦争下の徹底した秘匿政策もあり、地元住民ですらその事実を知る人は大変少ない。夫人は医院を続けていたが、翌20年アメリカ空軍の空襲で医院が焼失したため、子供3人と福住の故郷、江部乙町へ引き揚げ、現セイコーマート向かいで昭和47年まで開業していた。

福住は、早くから歌を詠み、学校の休暇ごとに友人と歌会を開いていたという。大正15年(1926)「潮音」(ちょうおん)に入る。没後、小田観螢から歌集を新壘叢書として出版の話があり、医学の師、南浦邦夫教授とフミ夫人の協力で、「歌集春雷」が刊行された。

「 国後の雪の稜線雲母(きらら)なし、錯落として海に入る見ゆ 」

参考【文献】

- 『根室・千島人名辞典』根室市博物館準備室内、編集委員会編
- 『歌集春雷』(福住一郎著、短歌雑誌社、1954)、
- 『東に灯はともる～根室病院の百年』(鷺見博和著発行、2000)